
巻頭言

2021年度、総合文化研究所は「多文化共生としての舞台芸術」と題する連続セミナーを主催した。前年まで柴田勝二先生がコーディネーターを務めてくださっていた世界教養プログラムのリレー講義「舞台芸術に触れる」を、少し形を変えて引き継いだのである。リレー講義は、もともと外語祭の語劇を支援する目的で開講されたものだったが、今回は語劇支援に加え、舞台芸術と多文化共生との関係性を模索するとともに、舞台芸術というジャンルの存在意義そのものについてもあらためて問い直すことを目的とした。

新型コロナウイルスのパンデミックで全8回を一般公開のオンラインで行ったが、そのために、文字どおり地球の裏側からも視聴していただけたことは「怪我の功名」と言えるかもしれない。

どの回も刺激に富む充実した講演だったが（詳しい内容については本誌「活動報告」をご覧ください）、とりわけ深く印象に残ったのは、第3回目のセミナーで東京演劇集団「風」の演出家・江原早哉香さんが、視覚・聴覚障害者のために字幕や手話を用いてバリアフリーの上演をおこなっていると話されたことだった。

だから先日、濱口竜介監督の話題作『ドライブ・マイ・カー』を見たとき、主人公・家福が演出し主演する『ワーニャおじさん』が、日本語、英語、台湾語などの多言語による演劇で、韓国手話も含む芝居だったのが嬉しい驚きだった。この映画は村上春樹の短編を下敷きにしており、原作でもチェーホフの戯曲は重要な役割を担っているが、映画ではチェーホフの比重がさらに大きくなっているように感じられた。ここには「多言語の横断」が見られるだけでなく、原作（小説）で言及される戯曲（演劇）を多言語・バリアフリーの芝居にアダプトした作品（映画）という「ジャンルの横断」も認められるわけである。とりわけ韓国手話によるソーニャの演技が息をのむほど美しかったことを強調しておきたい。この映画の白眉だと思う。

驚いたのは、なにも劇中劇が言語やジャンルを横断していたからというだけではない。第2回目のセミナーでご登壇いただいた杉山剛志さんが、ベトナム国立劇場で実際に『ワーニャおじさん』をベトナム語で上演した演出家だったからでもある。本学の公式ホームページにこの連続セミナーの専用ページがあるが、そこで使わせていただいている写真は、まさに杉山さん演出の『ワーニャおじさん』の一場面なのだ。なんという偶然だろう。というわけで、山口裕之先生と連続セミナーを実施してきた私は、『ドライブ・マイ・カー』に強い愛着と因縁めいたものを感じてしまったのである。

それにしても、チェーホフはどうしてこうも現代人を惹きつけるのだろうか。岩松了、ケラリーノ・サンドロヴィッチ、三浦基といった才能ある日本の演出家たちが飽かずにチェーホフ劇を上演している。ワーニャおじさんの言いようのない喪失感と狂おしいほどの悔恨、そしてソーニャの汚れない前向きの意志。少なくともふたりの言葉が、時空を横断してきて私たちの心を揺さぶることはまちがいない。

総合文化研究所長 沼野恭子

